

「クスノキプロジェクト」と平和への思い

令和7年8月29日

戦後80年、平和を考えるきっかけに。「長崎のクスノキ」

いよいよ2学期が始まります。終業式でも話しましたが、今年も猛暑続きの夏でした。みなさん、充実した夏休みを送ることはできましたか。自分の夏をしっかりと自ら声に出して語れるよう、自主的に、責任持って取り組めたでしょうか。

今年は、戦後80年という節目の夏でした。テレビ、新聞、ネットなど特集を組んで報道などがされていました。戦争を知らない世代が、日本の大半を占めるという国になったということで、「国が異なれば、人を殺すことを容認するという戦争を、その悲惨さを肌で感じる」と薄れ、「国のためにどれだけ辛いことを乗り越えて、国のために活躍したという美学に惹かれていくこと」にならないよう、しっかり語り継ぐことの大切さが語られていました。皆さんも十分知っているように、世界を見ればロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザ地区での無差別掃討作戦など、軍事力を使った国の支配は、決してなくなったわけではありません。私たちは、自分たちの社会の日常を平和だと感じるのであれば、その平和を守る意識を強く持たなければならないと強く感じた夏でした。

富士宮北高校は、今年、創立88年目を迎えています。つまり、生まれは、戦前、戦中です。皆さんも知っていると思いますが、中央道から校舎に入った右側、富士山に向かって第一体育館の左側に、ひっそりと「ある遺構」がありますね。戦時中には、今の皆さんと同じ高校生に対しても様々な訓練が行われてきました。その一端がわかる、「国威発揚（こくいはつよう）」と書かれたものが残っています。国威発揚とは、国家がその威光（国としての力や名誉）を他国に対して優位性を示す行為や政策を象徴する言葉です。軍事パレードなどがその良い例ですが、生徒たちを兵士として育てることで、他国にその強さをアピールする場として、学校などでの訓練を見せつけていたのです。私は、そんなことは絶対にあってはならないと強く思い、時々見に行きます。

伝統校では、このような石碑の場所に「国旗掲揚」をするポールを立てておき、日本国旗を見上げながら、国のために頑張ろうと気持ち新たに場所となっていました。皆さんも、本校に通っている間に一度は、しっかりと見てほしい。そして、そこで、平和を守ろう、私たちがこれからは、平和を守って、自分の子どもたちに渡すのだと思ってほしい場所です。

今年の8月9日、長崎では、歌手の福山雅治さんが、市民と共に「クスノキ」を合唱していました。長崎の山王神社（長崎市坂本）の「山王神社の大クス」をはじめ、被ばく樹木が、今も、核の炎に焼かれたと思えない立派な様子に感動しました。戦後の日本を見守り続け、ずっと、わたしたちに寄り添い続けてくれたその樹木の強さと優しさを、世界の平和首長会議では、（広島「アオギリ」と長崎の「クスノキ」）平和の象徴として、その苗木を2世として植樹していく取組があることも知りました。ある中学校では、生徒たちが、平和を考え続けたいと、その苗木をもらってきて、植樹したという取組も知りました。私たちの戦後は、「平和への思い」も皆さんのような若者のアイディアでどんどん良いものになっていくはずで、皆さんも平和を考えるきっかけを、いろいろなチャンネルで得てほしいと心から願っています。



平和について学ぶ場としての修学旅行

高校生活において、平和について考える機会は、教科・科目などもありますが、体験を通して学ぶ場のひとつに沖縄修学旅行があります。修学旅行は、日常の学校生活を離れ、「見聞を広め、自然や文化などに親しみ、よりよい人間関係を築くなどの集団生活の在り方」を考えます。ここでは、仲間と体験を共有し、思いや意見を交わしあい、新たな自分の考えを身につけていくことがねらいですので、2年生は、特にアンテナを高くして、平和に関することに「気づく」ように学習を積んでほしいと思います。1年生は、授業の中で、平和に関して学び、3年生は、沖縄などを思い出し、キャリアの中でも、平和について考え続けてほしいと願います。



南城市「糸数アブチラガマ」

<https://abuchiragama.com/>

糸数アブチラガマは、沖縄本島南部の南城市玉城字糸数にある自然洞窟（ガマ）です。沖縄戦時、日本軍の陣地壕や倉庫として使用され、戦場が南下するにつれて南風原陸軍病院の分室となりました。



沖縄県立読谷高校の取組「6. 23 平和特設授業」動画を一部見ても興味深い。<https://www.yomitan-h.open.ed.jp/72025623.html>



琉球文化アーカイブ「平和通り」

那覇市から国際通りに通じる商店街。現在、国際通りとして親しまれている。1946 年頃は、旧市街が米軍に支配され立ち入り禁止地域され、この場所に人々が集まってありあわせで集落ができた。

いざ！2 学期！自ら望み、自ら決める！

今年の夏、私自身は、積極的に「生成 AI とどう付き合うか」に関して学び始めました。生成 AI に関しては、人それぞれイメージが異なり、人によっては、情報技術、また別の人は、書類作成、話し相手、仕組み、犯罪・・・どう見ているのかは千差万別です。『2035年の人間の条件』暦本純一 落合陽一著（マガジンハウス新書2024）で、暦本氏が、世界で人間に必要とされる能力は何か？という問いに対して、「必要」という概念が壊れるんじゃないでしょうか？（略）例えばプロの絵描きになろうと思ったら、今は絵を描く才能が必要とされますよね。でも、それを AI がやるようになると、そもそもその人が絵を描く「必要」があるのかどうかもわからないじゃないですか」「だから、考えるべきは「自分に何が必要か」ではなく、どちらかというと「自分は何がやりたいのか」だと思います」と述べています。私や、高校生の皆さんには、「自分ごと」にしにくく感じるかもしれませんが、今、必要なのは、自分と向き合い、自分の気になること、好きなこと、こだわりたいことを自主的に選択していく練習、トレーニングだと思います。このことを、生成 AI の使い方、仕組み、社会の変化を学ぶたびに再認識した夏でした。

パラリンピックとデフリンピック

聴覚障害者の国際スポーツ大会「東京2025デフリンピック」が11月15日開幕します。日本では、初開催となるそうです。静岡県内でも自転車2競技を伊豆市で実施されます。デフリンピックは、聴力レベルが 55 デシベル（話声と同程度）以上の選手が出場するそうです。身体、視覚、知的障害がある選手が対象のパラリンピックとは別の道を歩んできています。大会では、補聴器を外し、全員が公平に聞こえない立場で参加し、音に頼らない戦術やコミュニケーションによって競い合うもので、聞こえない不便さはあっても、それ以外はなんでもできるし、楽しむことができる当事者を知ってほしいという。「行け」は、「拍手（両手を顔の横にあげて手首をひらひらさせる）をした後に、両手をパーにして前に押し出す」そうです。パラとデフなぜ一緒にやらないのか。気になった人は、探究してみてください。